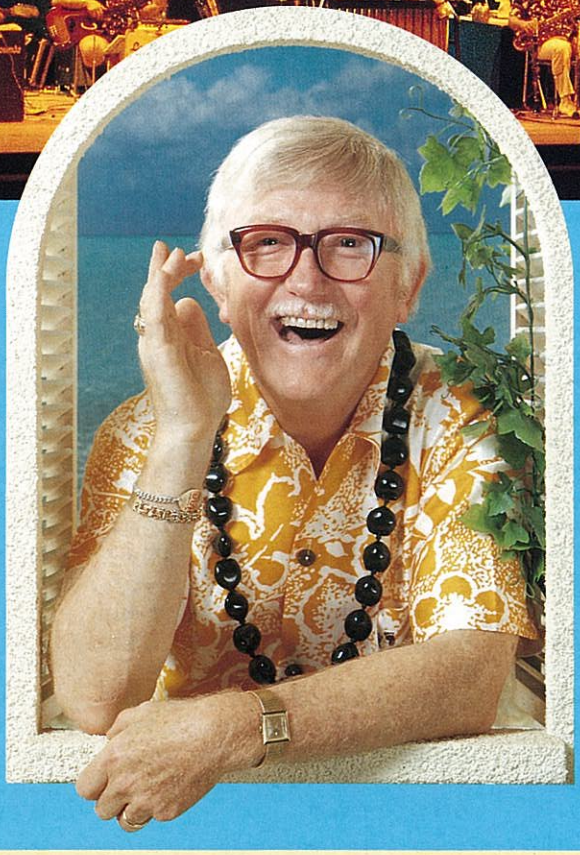
アメリカン・ムードミュージックの王者.堂々19度目の来日!

ビリー・ヴォーン楽団

BILLY VAUGHN
AND
HIS ORCHESTRA

●指揮
ビリー・ヴォーン



〈主なレパートリー〉

★浪路はるかに Sail Along Silvery Moon
★夕日に赤い帆 Red Sails in The Sunset
★峠の幌馬車 Wheels
★真珠貝の歌 Pearly Shells
★真珠の首飾り String of Pearls
★グリーンスリーブス Greensleeves
★茶色の小瓶 Little brown jug 他

ITO MUSIC OFFICE

6/29 (金) PM7:00 START

たんば田園交響ホール 全席指定
TANBA DEN-EN SYMPHONY HALL
A席4,800円 B席4,000円 (当日 500円高)
主催■篠山町

【前売券発売所】 前売開始—4月29日

篠山町内／書店・楽器・レコード店・役場支所
多紀郡内／各町公民館（各農協で取次）
氷 上 郡／春日町文化ホール・柏原観光案内所
三 田 市／ニチイ三田店サービスコーナー
京 都 府／両丹プレイガイド

お問合せ たんば田園交響ホール 〒669-23 兵庫県多紀郡篠山町北新町41 ☎0795 52 3600

No.35

ビリー・ヴォーン楽団の人気と秘密

⊙岡部迪子

さわやかなビリー・ヴォーン・オーケストラの来日公演が、特にこの時期に実現したのは、実にグッド・タイミングであった。うっとおしい日本の雨期、じめじめした梅雨の日々に、1日の疲れをいやすひととき、何よりの心の特効薬である。このオーケストラの演奏は、19回目の来日公演だという。その期間も6月18日来日して7月25日帰国まで、30都市で30回の公演であり、そしてオフの日が5～6日というかなりのハード・スケジュールだが、つまり、それほど各地でモテていることの証しなのだ。全体の公演予定地を見ても大都市中心ではないが、そのきめ細かな公演スケジュールは、ビリー・ヴォーン・オーケストラが日本に定着しているスゴサが、わかろうというものだ。何しろ19回目だというのに、すでに来日1ヵ月前にチケットがソールドアウトになっている公演地があるという騒ぎなのだから……。

それでは、なぜ今、ビリー・ヴォーンなのか？を考えてみよう。それには、曲目にざっと眼をとおすと、彼のオーケストラの根強い人気を解く、鍵が秘められているように思う。

まずその第1は、リラックスした楽しい気分に、ごく自然にさそわれる、ユニークで親しみやすい、ビリー・ヴォーン・サウンドである。それがどんなものかは、私なりに考えると、いつ、どこで聞いても、即ビリー・ヴォーンとわかるオーケストラの個性があること、時代や流行を越えた普遍性を確立しているからであり、イージー・リスニング・ミュージックとは、ポップ・オーケストラの魅力とはこういうものだという、その典型を、軽快に明るく、ロマンティックに伝えてくれる点にある。

その第2は、選曲の妙味ではないかしらと思う。たとえば、'90年代の現代ファッション面から言うと、'50年代～60年代への回帰現象がおきていて、それは世界的な傾向でもある。

ビリー・ヴォーンといえば、"峠の幌馬車"であり、"浪路はるかに"であり"真珠貝の歌"なのは、一連のこうしたナンバーこそが、ごく自然に長い間、耳になじんでいる、ビリー・ヴォーン・サウンドの基礎をなしているからである。それはビリー自身も吹奏するサックスをはじめ、トランペットなどのブラス隊が活躍する、モダン・ポップ・スタイルを確立した点にもある。それには、楽団のメンバーに、実力者ぞろいのジャズ・プレイヤーを加えていること、そのいっぽうで、ハワイアンとスロー・ロック・ビートを組合わせたり、カントリーに軽快でスウィンキーなジャズ・フィーリングをフュージョンさせたり、総体的にユニーなアレンジを活かした、音楽に対する発想のするどさに、常にみがきをかけている不断の努力があるからでもある。それがロック・バンドのパワフルな若さとなり、スマートで上品なダンス・バンドの色彩を強くしたり、ストリングスを多用することで、華麗なムード・ミュージック・オーケストラに変身もする。そのために時には美しいコーラスを加えることもある。

それらが混全一体となって、時にはジャズィーに、そしてロマンティックなあふれるムードで陶酔させるほどファンタスティックなオーケストラ演奏をくりひろげることになる。

歯切れがよくて起伏に富んだ明るさや、ファンキーでモダンなアダルトむきのサウンド。ハートウォーミングなやさしさがにじむソフトなギター・ソロをメインにしたラブ・ソングや、壮大なスケールで楽しむドラマティックな映画音楽などばかりでなく、時には日本のヒット曲も器用にこなすプロフェッショナルとして、すべての音楽を包括する、ふところの深さが、あのアメリカ、アメリカして、リラックスしたビリー・ヴォーン・サウンドのすべてと言えるようである。

その第3は、ビシッと組立てられている曲目の配列や、コンサート構成の良さである。華やかなオープニングにも、第1部の終わりにも、そして公式のクロージング・テーマとして常にあの"浪路はるかに"がくりかえし演奏されるこ[illegible]ろう。コンサートの総合的な流れと共に移り変わる音楽の流れや、アレンジの大切さを、ごくわかりやすくソフトで上質なスウィート・ムードで、やさしく美しく伝える魔力は、ビリー・ヴォーンだからこそ出来ることである。そのやさしさが、明るさが、爽やかさが、美しさが、おだやかな平均的な日本人の感性に、この上もなくピッタリとフィットするからこそ、日本での根強いファンの支持を受けていると私は考えている。